

白 嶺 丸 進 水

岡 野 武・雄

かねてから通商産業省が建造計画を樹て、金属鉱業事業団が中心となって建造を進めていた海洋地質調査船は11月16日午前11時50分に 三菱重工工業㈱下関造船所において無事に進水した。

この地質調査船は 所有主である金属鉱業事業団の平塚理事長によって 白嶺丸 (Hakurei Maru) と命名され、次いで友綱が切られて白嶺丸は船台を滑り進水した。

進水式後披露パーティ (下関グランドホテル) が行なわれ、春木造船所長、船主としての平塚理事長の挨拶、来賓として 通商産業大臣 (小林地質調査所長代読) などの祝辞があった。

進水した白嶺丸は49年3月までに艤装が行なわれ、3月末に事業団に引渡される。

この白嶺丸は海域における地質調査研究に専従する海洋調査船であるため、建造に当っては 金属鉱業事業団の地質調査船建造委員会において、高木 奈須先生やその他委員とともに、建造後の船の主な使用者である 地質調査所の研究が主に搭載機器に関する設計を担当してきた。進水後の艤装に当っては 地質調査所の担当研究者は一段と多忙になるう。

白 嶺 丸 の お も な 仕 様

総トン数 約1,800トン
 長さ(垂線間) 77.00m
 幅(型) 13.40m
 深さ(型) 5.30m
 計画満載吃水(型) 5.00m
 最大速力 約15ノット
 航海速力 約14ノット
 航続距離(13ノットで) 約12,000カイリ
 最大搭載人員 55名(うち研究者20)

主 要 塔 載 機 器

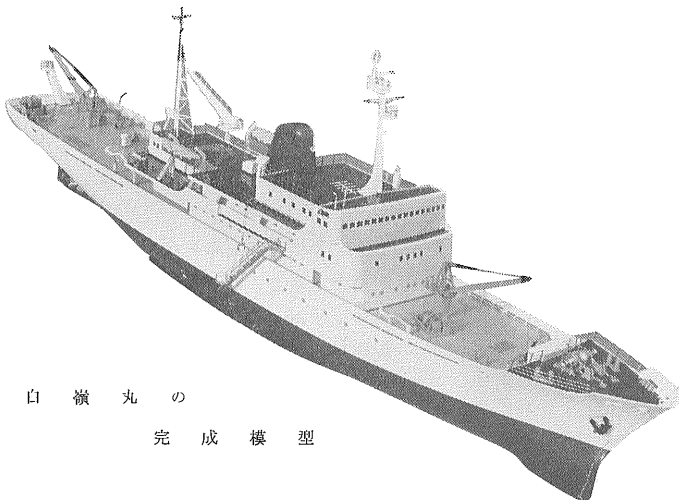
ウインチ類 (10,000 m, 12mm φ 2本; 13,000m
 テーパード5.4~8.1 mm φ 1本 その他) 海底堆積物の採取 物理量の計測
 深海底テレビ 深海底カメラ 船上重力計 エアガン 磁力計 ボトムソナー 人工衛星システムおよびデータ処理システム

昭和49年の調査計画(予定)は次のとおりです。

	期 間	海 域	日 数
1	5/上~5/下	相模灘	20
2	6/上~6/下	南方諸島海域	20
3	7/上~7/下	紀伊水道	25
4	8/上~10/	ハワイ方面海域	65
5	11/上~12/上	沖縄東方海域	35
6	1/下~2/下	南西諸島海域	35

この白嶺丸は昭和49年度から海上における調査研究を開始する。白嶺丸による海洋研究は、地質調査所が中心となって行なうもので、昭和49年度の白嶺丸の運航費、管理費約4.5億円(要求額)、研究費約1億円(要求額)はいずれも通産省が支出し、6回200日間の調査研究を行なう予定である(昭和50年度以降は年間250日の予定)。

(筆者は 企画室長)



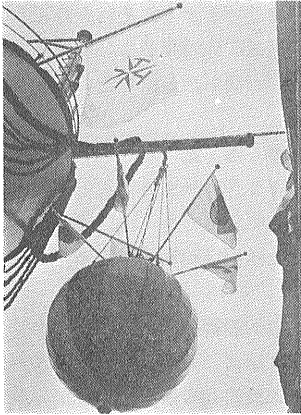
白 嶺 丸 の
完 成 模 型



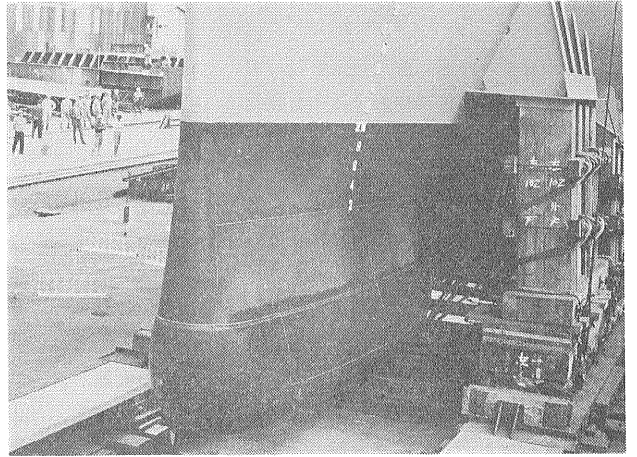
← 通産大臣の祝詞を代読する小林勇地質調査所長



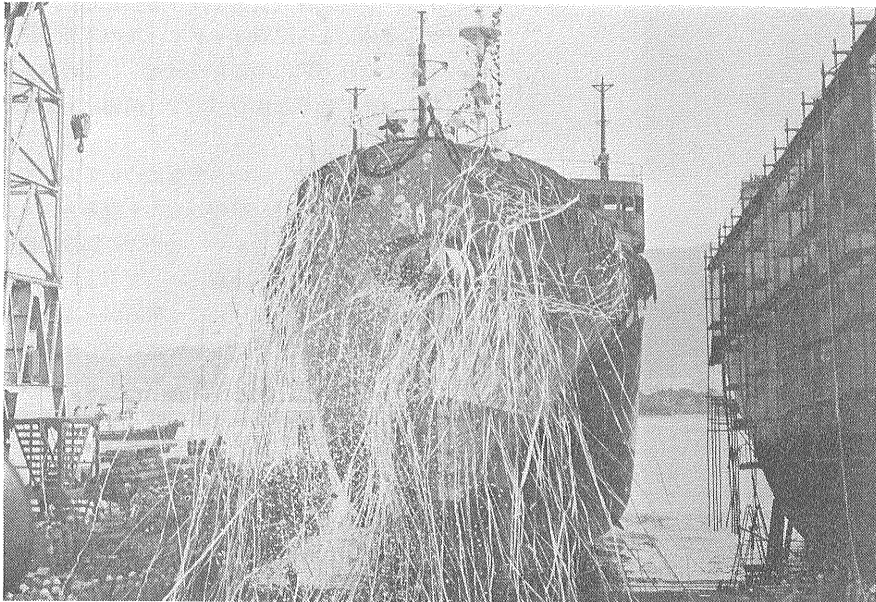
→ 船名もはれやかな白嶺丸



← 進水直前の白嶺丸船首とクス玉の上にかかげられたシンボル旗（東西南北を示す磁石とハンマー、タガネを配している）



→ 白嶺丸船首のドーム音波機器の発振器類が内装される。この部分は今後船がドック入りしたとき以外は見ることができない



進水を開始した白嶺丸 船首のドームを壊つけないように船尾に鍾りをつけて 前あがりて進水した